

第172回山口西田読書会（2018年5月12日）

前回（4月21日）の Protokol

出席者：10名

テキスト：「直接に与えられるもの」

今回は、前回（テキスト p.30 の 7 行目～p.31 の 13 行目）の復習とそれに対する議論、山口さんの哲学的問いを経て、テキスト p.31 の 13 行目～p.33 の 14 行目までを輪読した。

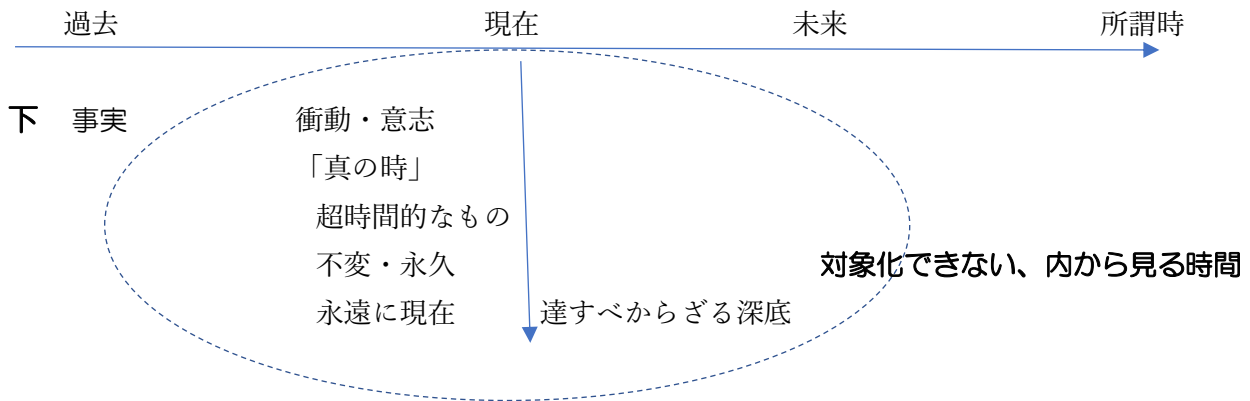
I. 前回の復習（Protokolに対する問い&議論）

【「超時間的」とはどういうことか】

Protokolのなかの、「所謂時（=超時間的の時）」という記述が気になる、ということで、改めて「超時間的」とはどういうことかを皆で再確認した。

・「所謂時」というのは、過去、現在、未来と直線的に経過する時を指している。それに比して「超時間的」なるものというものは、以下の図の「下」に位置している。（物力は「上」）

上 意識・判断（反省）



・ p.31 の 7 行目からの文章が、超時間的の説明に該当する。所謂時を超える。直線化できない時、空間化できない時がある、といっている。

・ 以上のように、「超時間的」に関してテキストの内容は皆で確認し合ったが、現在に過去も未来も含んだものが「真の現在」という捉え方や全体を部分に含むという記述等については、解釈が難しく、議論は保留となって、ひとまず先に進むこととなった。

II. 前回の哲学的問いに対しての議論

「唯一実在」を、西田は純粹経験とするが、テキストを離れて、メンバー各々は、どう考えているのか、という問いかけが発せられ、発問者自身は意識の志向性にあると思っている。ただこの問いに関しては、この会は西田が唯一実在をどう捉えようとするのかを学ぶ趣旨をもつため、この議論は今回保留となった。

III. テキスト p.31 の 13 行～p.33 の 14 行の要約&議論

1. 要約

1) 具体的経験（下）を認識対象界（上）に映した時、その対象界と内面的時の接続点が現在である

対象界と内面的時の接続点は結合点でもあり、超越的意識としてある。超越的意識は、外面的方向に向けば認識主観となり、内面的方向に向かえば超越的意志となる。内（下）への流れが閉じられると客観的対象界を見る、その流れが開かれると内面的持続の世界を見ることが出来る。このように、認識主観の立場（所謂時の範疇）にあっても、いつでも超時間的なもの（下）に接しているといえる。

2) 自己の主観的作用を、(所謂時として) 時間の上に生滅すると考えるのは、それを、(自己が超時間的なものに接して) 反省することのできない底から見ているから、そのように考えられる。(生滅の「点」ではなく、縦の「線」として)

3) 反省できない底に入るほど、時を超越し自他を超越することになるから、客観的記憶が可能となる。

4) 目的的统一としての自己の根底はいつでも働いている(眠っている間も覚めたものがあるはず)

5) 目的的统一には何時でも現実を越えて志向するものがなければならない。

目の前に現れているものだけを全てだとみれば、それは目的的统一と結びついていないことになる。

しかも目的的统一は何時でも無限の根底に結合していなければならない。自己はその結合点にある。

6) 真理を考える(上) 時、真理への意志(下)の上に立って考えるのである。この意志は時間を超越している。我々が考えていないと思われる時においても意志主観は働いており、無意識の時間があったと考えられるのも、その意識主観(知的主観として)が常に働いているからである。

2. 議論

1) 上(意識、判断、反省)と下(事実、直観、純粹経験)を対比させて、使われている言葉を整理して読み取ることの必要性について、佐野先生より説明があった。

p.31の13行目～「具体的経験」は下、次の「意識一般」は上。

p.32の1行目～「外面的方向において認識主観」は上、「内面的方向において超越的意志」は下。

2) 「種々の客観的世界」とは何かの確認

テキスト「自覚における直観と反省」跋 p.340より引用「…認識論上真の主観というべきものは、ある一つの客観界を構成する統一作用の如きものと考えねばならぬ。…右のように考えてみると、我々は種々の立場によって種々の世界ができるということが出来る。…数学者の立場からは数の世界ができ、芸術家の立場からは芸術の世界ができ、歴史家の立場からは歴史の世界ができる。」

3) p.32～「(この深き反省することのできない底より見ている立場に立つから) 客観的記憶が可能となる、記憶の一般的妥当性が成り立つ」というのはどう読み取ればよいか。

これについては、「善の研究」第2編6章の「唯一実在」の箇所を確認。P.99の3行目「(所謂) 時間というのは我々の経験の内容を整頓する形式にすぎないので、時間という概念の起こるには先ず意識内容が結合せられ統一せられて一となることができねばならぬ。…意識の統一作用は時間の支配を受けるのではなく、かえって時間はこの統一作用に由って成立するのである。」

4) p.32「時を超越し又自他を超越する」という前後の文章の解釈について

- ・西田はずっと思考するプロセスにおいて、上と下が反転する、というところに至ったのではないかな？
- ・ここでは西田は記憶が成り立つ根拠を考えようとしているところ(佐野先生)。反転については保留にしておきましょう。
- ・「達すべからざる底」とは、修行僧の悟りの境地のようなもの？すべての人間にもあてはまる？
- ・結合点に自己がある、ということさえ満たせば修行僧でなくても起こりうることはないかな？
- ・「自他の超越」について「善の研究」第2編46章の「唯一実在」で確認。P.101の5行目より「…ただに一個人の範囲内ばかりでなく、他人との意識もまた同一の理由によって連結して一とみなすことができる。…各個人の精神は皆この社会精神の一細胞にすぎないのである。」しかし果たしてこの説明で、自他の超越を説明したことになるのだろうか？これは問いのまま。

IV. 哲学的問い

「人生において、物理的時間の流れが先にありき、ではなく、超越的意志(もしくは目的的统一)のありようによって「時」の性質が決まる、となると、対象界と内面的時の接続点、結合点に居る自己は、外面的方向に向かうばかりで(物理的時間に追われる)、内面的時に向かう感覚、感性の喪失ということも起こりうるのではないだろうか？」

記録(新木)